幼兒の教育

昭和十四年二月

二月の朝ひる

霜の道を凍えて來る子等を待ち受けて、けさのストーブはさつきから赤く燃えてゐるけれども、さて、あんまり暖め過ぎてはと氣にかゝる。外套をぬがせ、手袋をとつて、さあ〳〵朝の體操にとドアーをあけかけて、けふもためらふのは此のしぐれ空である。閉ぢ籠めてゐてはならぬと氣を勵ましてはみるが、またしても子どもの咳が耳についてならぬ。おひる前からのうす日をたよりに、午後こそは外遊びと子ども等とも約束してゐたが、午後といふと風の出る此の幾日をどうしやうもない。思ひきつて一隊を引きつれ、お口をふさいで、お鼻でいきをしてと、云ひつゞけ〳〵一廻り馳け足をさせて見た後で、何子さん、何子ちやん、苦しくはなくつてと、言つてはならぬ弱い言葉がつい口に出る。

……

もとより鍛練を方針とはするが、こんなことではとは強く思ふが、實際にはまことふ實際家の心こそ、貴いといはないまでも、ありのまゝの二月の朝ひるである。

（倉橋惣三）